

国本はる乃さん

(浪曲師)

やるからには、目指したい「てっぺん」

明治後期から昭和三十年代にかけて、浪曲は娯楽の王様だった。現在は、浪曲専門の寄席やラジオ番組はあるものの、往時の勢いをまったく欠いている。しかし奮闘する浪曲師たちもいる。その中の一人、超若手の国本はる乃さんに浪曲の世界、その魅力聞いた。

ピアノの稽古がなぜ浪曲に

—女の子と浪曲——ピンと来ないのですが、どんなきっかけがあったのですか。

小学四年生のころ、父の友人から「何かお稽古事はやっているの?」と聞かれ、「ピアノを習っています」と答えたところ、「ピアノより三味線向きだなあ」と三味線を勧められ(笑)、師匠である国本晴美の元へ連れていかれました。父がセミプロで落語をやっていたこともあり、晴美師匠とは知り合いだったんです。

親も勧めるし、強制的に連れて行かれるし、本当はイヤだったんです。そして、いざ始めてみると、浪曲に使う三味線の太棹は子どもの手には大きくて扱いつらい。「それじゃ、お歌から始めてみましょうか」と、結局浪曲を教わることになってしまったわけです。

師匠と父は、最初から私に浪曲をやらせるつもりだったんじゃないかと思います。父の友人も「ピアノよりも三味線って顔だよ」と、よくわからない理由で勧めましたから(笑)。

師匠には弟子が四、五人いましたが、少しでも若い世代に引き継いでもらいたいという師匠の思いがあっ

たのかもしれない。弟子で残っているのは私一人なのですが。

—好きにはならなかったんですね。

当時は本当に嫌々やっていました。週末二日のうちのどちらかに二時間ほどの稽古だったのですが、親の車に乗せられて師匠のお宅へ行くまでの十五分ほどの間は、「もう帰りたい」と泣いていたそうです。



●くにもと・はるの 1996年生まれ。小学4年生の時に国本晴美へ入門。高校卒業後、日本浪曲協会へ所属し、2年間の前座修業を経て2016年に年季明け。「国本はる乃」として一本立ち。寄席「木馬亭」や各地で開催される浪曲や講談、落語の会などに出演。演目に「秋色桜」「將軍の母」「真柄のお秀」「孝子の訴人」「弥作の鎌腹」など。

浪曲を聴いても、そもそも言葉が難しく理解できないし、師匠の家に着くと、晴美師匠と三味線の師匠、あとなぜか師匠のお友達もいて、三人の怖い師匠たちに囲まれて厳しい稽古が始まるので、楽しくない。だから稽古もまじめにやらない。台本を読んで暗記して、師匠の節(歌の部分)を聴いて覚えるけれど、上達したいとは全然思いませんでした。向上心ゼロでした。それよりも当たり前ですが、友達と遊びたい。でも、浪曲の話が合う小学生なんているわけじゃないじゃないですか(笑)。

それでも続けたのは、単に親がやめさせてくれなかったからです。それと稽古が終わると、師匠からポテトチップスをもらえる。それを食べ終わる頃には、私の機嫌も良くなっている。帰り際にお土産にもう一袋持たせてくれる。このご褒美は、師匠が毎回用意してくれていました。ポテトチップスがなければ、私は浪曲師になつていなかったでしょうね。もちろん、当時は浪曲を仕事にするとは思いませんでした。

—ではなぜ浪曲師になろうと?

習い始めた当初は、浪曲の良さをわからないながらも、年に二回、稽古の成果を舞台上で披露する時だけは